

幼児教育史学会 会報

第 15 号

目 次

第 8 回大会報告

会長あいさつ

研究発表・シンポジウム

第 8 回総会報告

「第 8 回大会開催を終えて」…………… 勝山吉章

第 8 回大会参加記 ……………

石橋哲成 高月教恵 織田望美

会員研究情報

「キリスト教幼稚園保育者養成史研究へ試み」

…………… 島山祥正

新入会員情報…………… 日暮トモ子 杉本真由美

寄贈図書

事務局からのお知らせ

○第 8 回大会報告

宍戸健夫（愛知県立大学名誉教授）会長より大会挨拶があった後、以下のように研究発表、シンポジウム、総会が行われた。

【研究発表】

司会：湯川嘉津美（上智大学）

塩崎美穂（尚絅大学）

1. 和田實のカリキュラム論

一目白幼稚園における実践に着目してー 近藤めぐみ（東京学芸大学大学院）

2. 岡山孤児院と二葉幼稚園の社会的結合とその変容

一孤児院と保育所の人脈、表象、統合をめぐるー 稲井智義（東京大学大学院）

3. 末期「保育問題研究会」における保姆会員の思想と行動
 ー保育雑誌『国民保育』を手がかりとしてー 浅野俊和（中部学院大学）
4. 舞鶴幼稚園の掛図・絵画に関する研究 牧野由理（東京都市大学）
5. キリスト教幼稚園の創始と保姆養成をめぐる
 ー三田・神戸の役割と宣教師たちの連携ー 畠山祥正（北陸学院大学）
6. 両大戦間期イギリスにおける保育学校運動再考
 ー担い手たちの課題意識ー 梶瑞希子（聖徳大学）

【公開シンポジウム】

テーマ：「幼児教育史における保育運動史研究の意義」

司会：勅使千鶴（日本福祉大学）

報告者：浅野俊和（中部学院大学）「戦後日本の保育運動」

成富清美（福岡保育問題研究会）「福岡の保育運動に関わって」

指定討論者：宍戸健夫（愛知県立大学名誉教授）

【第8回 総会報告】

報告事項

- I 第7回大会年度（2011. 10. 1 - 2012. 9. 30）事業報告について
- 1) 会員数は150名。除籍1名、退会5名。（2012年11月17日現在）
 - 2) 会報13号、14号の発行がなされた。
 - 3) 機関誌『幼児教育史研究』第7号の発行について、編集委員長梶理事より報告された。
 - 4) 学会10周年記念事業の共同研究について責任者である梶理事より報告がなされた。
 - 5) 機関誌の電子化について、CII-NIIへの掲載手続きが進行中という報告があった。
 - 6) 教育史学会コロキウムに参加した。
 - 7) 事務局移転について報告があった。
- II 第7回大会年度の決算報告が担当者（別府理事）よりなされ、監査を受け了承された旨
 監査報告書とともに報告がなされた。（監査：福元真由美会員 高田文子会員）
- III 第8回大会年度（2012. 10. 1 - 2013. 9. 30）事業案について
- 1) 会報15号、16号の発行予定である。
 - 2) 機関誌『幼児教育史研究』第8号の発行予定である。（200部印刷予定）
 なお、投稿期間が5月1日～31日に変更される。
 - 3) 学会10周年記念事業として共同研究の継続が確認された。
 - 4) 機関誌の電子化作業の継続について了承された。
 - 5) 第8回研究大会が実施される。（於：福岡大学）
 - 6) 第9回大会は、青山学院女子短期大学（大会委員長：村知稔三理事）での開催が了承

された。

7) 会員名簿を発行する予定。会報第16号で詳細を通知する。

IV 第8回大会年度 予算案(別府理事より提案)

V 次期大会について、会場校より挨拶があった。

○第8回大会開催を終えて

勝山吉章(福岡大学)

幼児教育史学会第8回大会は、会員のみなさまのご協力を得て、無事に終えることが出来ました。ありがとうございました。ただ、何かと行き届かないところも多々あり、大変ご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

大会参加者は41名。そのうち、院生参加者が7名、臨時会員が6名。懇親会には25名が参加。また、大会翌日の「幼児教育史研究を愉しくフォローする会」には、14名の参加がありました。参加者の中には、東京はもちろん、上越や富山といった遠方からもはるばる駆けつけてくださった会員がいて、大変感激している次第です。また公開シンポジウムには、会員外として、福岡保問研を中心に11名が参加してくださいました。

自由研究発表をした6名の会員の発表は、いずれも質が高く、「兄貴分」の教育史学会の発表よりも、内容的には充実していたと言っても良いと思えました。これは、本学会の機関誌の編集が極めて厳重に行われ、水準の高い論考が掲載され続けていることと関連しているでしょう。それぞれの発表では、活発な質疑が繰り広げられ、全体討論の時間がかなり足りなかったことが悔やまれます。

公開シンポジウムでは、保育所づくりなどの保育運動の歴史は、幼児教育史研究の重要な課題の一つであること、それ故、資料散逸の危機にあるなかで、資料収集などが喫緊の要務であることなどが論議されていました。公開シンポジウムには、福岡の保育運動関係者も参加され、自分たちの運動がアカデミズムの課題となっていることに感慨深げな様子でした。

総会は無事に終え、懇親会に入りました。この懇親会ではちょっと工夫しました。それは、できる限り業者に委託した料理ではなく、博多の手料理をお出ししようと。そのために、大学院生を中心に、大会の数日前からお料理の準備をしていました。だからでしょうか、懇親会はなかなか好評で、準備委員会一同、嬉しいお言葉をあちらこちらでいただくことが出来ました。

大会翌日の幼児教育史研究をフォローする会では、柴田賢市氏(中九州短期大学)に、「初期近代イングランドの家政論文献にみる子どもの<教育>-education 概念と親の役割を中心に-」について報告していただき、塩崎美穂会員にコメンテーターとして論点を整理してもらいました。活発な論議が進められ、あらためて家政論文献研究の重要性が浮かび上がったと思えます。

この度の大会では、年々学会の水準が向上していると何人もの会員がおっしゃっていました。来年度の大会が一層実りあるものになることを期待しています。

○大会参加記

初めて「幼児教育史学会」に参加して

石橋哲成（玉川大学）

2012年12月1日、「幼児教育史学会」第8回大会が福岡大学で開催された。学会員になったのは創設の時からであるが、大会開催時期がいつも勤務校の行事と重なって参加できず、今回初めて参加した。本学会には初めての参加であったが、教育史学会、日本ペスタロッチー・フレーベル学会、あるいはドイツ教育研究会等で顔なじみの会員の方々とお会いし、初めての本学会参加ということを忘れる程であった。

本学会は9年前に「学会」の形をとるようになり、毎年定期的に大会が開催されるようになったが、その原型は、私の知る限り、当時埼玉大学教授であった岩崎次男先生を中心とした「近代幼児教育史研究会」であったように思う。私はドイツのテュービンゲン大学に留学中の1980年頃、岩崎次男先生が文部省からの派遣でドイツに滞在されていた時に知り合うようになり、この研究会の存在を知った。私が大学の休みを利用して、ペスタロッチやフレーベル等の遺跡を訪ねていることを知って、その訪問記をこの研究会の会報に投稿するように勧めたのも岩崎先生であったし、帰国後、この研究会への参加を勧め、何度か気楽に発表させて下さったのも岩崎先生であった。

当時の研究会は、私の覚えている限りでは、毎回10名程度の集まりであり、岩崎先生の同僚の林信二郎先生や森川輝紀先生、若いところでは、大学院を修了してまだ日が浅い榊瑞希子先生や別府愛先生などが出席されていた。

さて、あれから約30年の月日が流れた。今回の大会には50名ほどの参加者があった。参加人数は当時に比べると、学会になったことで、約5倍に膨れ上がっていた。しかし、以前と通じる暖かい雰囲気を感じられた。発表に対する質問にしても、発表者の立場に立って、その後の研究に繋がる質問や助言が多かった。若い研究者にとっても、「発表してよかった！」という気持ちになったのではないかと思われた。

聞くところによれば、会長の宍戸建夫先生はともかく、宮澤康人先生は東京大学退官後も毎回出席されておられると聞き、昨年法政大学を定年退職された古沢常雄先生も、今年度も参加されていた。大学は定年退職になっても、この学会には参加されている先生がおられ、先輩の立場から質問や助言をいただけることは、学会の発展、若手研究者の成長のためにも重要なことだと思う。

大学は定年退職になってもこの学会には参加しよう、と思わせる雰囲気をこの学会には、いつまでも持っていて欲しいと思う。かく言う私も、現在の勤務校をもう少しで定年退職となるが、これを機会に本学会には時間の許す限り参加させてもらい、一緒に研究させてもらいたいと思っている。

(2012. 12. 5.)

大会参加記

高月教恵（福山市立大学）

私はかつて保育現場で仕事をしていて関係から、保育実践研究（内容・方法）を中心に研究をしてきました。ところが、平成13（2001）年3月に奈良女子高等師範学校附属幼稚園の保育日誌に出会い、一語一語読み進めていくうちにその当時の保育の光景が描き出され、私が勤務していた昭和50年前後の奈良女子大学附属幼稚園の保育実践に繋がっている

ことを肌で感じ、驚きと感動を覚えたのをつい昨日のこのように思い出します。その時から保育実践研究をするには、まず歴史的視点から研究しなければいけないことを痛感しています。私はわりと早い時期から会員にさせていただいているのですが、元々が歴史研究の専門ではありませんので、参加するたびに会員の皆様の研究姿勢に頭が下がり、少数だけれどもアカデミックな雰囲気になんか圧倒されてきたというのが正直な気持ちです。

今回の大会もまた皆様の発表から多くのことを学びたいと思っていましたが、朝から非常に体調が悪く、参加することを迷いながら会場に着いた時には2発表はすでに終わり、浅野会員の発表が始まっていました。朝からの3発表を十分に拝聴できなかったことを残念に思っています。現在私は、大原孫三郎が倉敷紡績工場内託児所を社会化して大正14(1925)年に設立した保育所「若竹の園」の保育日誌や資料を読んでいますので、稲井会員の「岡山孤児院と二葉幼稚園の社会的結合とその変容」を聞くことができなかったことを非常に残念に思っています。その後の発表の牧野会員の「舞鶴幼稚園の掛図・絵画に関する研究」では、復刻した奈良女高師附属幼稚園の保育日誌を思い浮かべながら再考察の必要性を感じさせられました。畠山会員の発表ではゲーンズとハウと甲賀ふじの関係について、榑会員の発表ではイギリスの保育学校運動について、非常に興味深く拝聴しました。午後からの「幼児教育史における保育運動史研究の意義」のシンポジウムでは、各地方の各々の小さな1団体の活動が町に県に国に広がっていき、それらが力となって今の保育の現状を作りあげていることを痛感しました。そう考えると、保育の質の向上が求められている現代において、地道な歴史的研究の意義の深さと必要性を改めて感じています。体調が悪く、発表が終わると早々に会場を後にしましたが、意義深い大会参加になりました。本大会事務局と関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

大会参加記

織田 望美(お茶の水女子大学・院)

今回初めて幼児教育史学会に参加させていただきました。歴史研究に足を踏み入れまだ間もない私にとって、研究発表、続く懇親会で皆さまと過ごさせていただいた時間は、大変刺激的で学ばせていただく点が多く、非常に有意義なものとなりました。

当日の発表を拝聴させていただき興味深く感じたのは、その随所に保育実践とのつながりが見られたということです。特に公開シンポジウムにおいては、戦後保育運動の動向を俯瞰した浅野会員の発表や、保育者の立場から実際に保育運動に関わってこられた成富先生のお話を聞かせていただく中で、保育の歴史を形づくってきた、人々の思いの積み重ねに触れることができました。

私自身は実践現場への関心から自らの研究をスタートさせたものの、現在の研究テーマが今現実に営まれている保育実践へとどのように結びついていくのか、未だ確たるものは見出せずにいます。ですが今後、自らの研究に真摯に取り組み歴史の深みに学びながら、一方で保育現場に身を置き現実の子どもたちと出会う中で、研究と実践とのつながりについて、自分なりに問い続けていけたらと思います。

最後になりますが、今回初めて幼児教育史学会に参加させていただく中で最も印象的だったのは、本学会の内包する研究分野や、そこに参加されている方々の幅広さと、そうした広さの中にも感じられるあたたかな雰囲気、会員同士の密な関係性です。今回大会に参

加させていただいたことで、自らの研究テーマを丹念に追及し深めていくことの必要性和共に、自身の関心のみに固執せず、広い視野を持ち続けていくことの大切さを感じることができました。そうした姿勢で研究に臨んでいくために、この広く、そしてあたたかな幼児教育史学会という場は、非常に大きな意味を持っているように思います。このような学びの場をこれまで育み、つくりあげてきてくださった宍戸会長をはじめとする諸先生方、現在この学会を支えてくださっているすべての方々に、心より感謝申し上げます。そして、これからは私も本学会の一会員として、微力ながらも皆さまと共に、幼児教育の歴史を紐解く営みに参加させていただけたらと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

【会員研究情報】

キリスト教幼稚園保育者養成史研究への試み

畠山祥正（北陸学院大学 2013年3月まで）

第8回学会大会で発表することができました。

「できました」というと不思議に聞こえるかもしれませんが、学会で研究発表を聞くたびに、若いころから一歩も進んでいない自分を知らされ、もう研究モードには戻れないと思っていたからです。研究テーマを聞かれると、「フレーベルのキリスト教についてやっていました」と、過去形で答えていました。

不器用な私でも、大学という場に職を得た時期には研究する余力があり、その成果を教育の場にも生かしました。私はそんな古きよき時代を知る最後の世代なのかもしれません。

歴史を含む基礎的研究をする人が少なくなったと聞くことがありますが、それは研究側の意欲や視点の問題ではなく、置かれている環境のせいだと思います。どうしてもまず担当する授業に直接関連する内容をやっているかどうか問われるからです。

今私は、大学教員という職にピリオドを打とうとしています。翌年のスケジュールがない分、この一年は研究できる余力ができました。しかし、長年気にかけてきたテーマとはいえ、取り組んでみるとほとんど初心者同様でした。同じ情報源でさえ食い違いがあります。ある事柄が何年にあったのかさえひとつひとつ確認する必要がありました。

以前、一度懇親会の席でお話したことがあったかもしれませんが、私の院生時代、幼稚園と保育所の世界を同時に学ぶことは難しかったと思います。恩師故前原壽先生は、私がフレーベル研究から幼児教育に関心を向けたと見るや、集中講義の講師として、1979年に岩崎次男先生、翌年宍戸健夫先生を呼んでくれました。その少し前から近代幼児教育史研究会に参加させていただき、今現学会にもつながっています。両先生は研究領域も手法も違いますが、事柄を社会や政策からみる視点は共通しています。

いつしか私も思想研究から社会史に軸足を移し、そこからフレーベルを見るようになりました。

*

幼稚園は同時代に盛んだった幼児学校と異質なものとして作られ、少数派の側にありました。

フレーベルの時代、大人は、①子どもが活動したいという欲求や衝動を「罪」の表れととらえ、②大人も罪人であるのに、子どもに対して絶対的支配者（神）としてふるま

いました。それが当時のキリスト教の主流、幼児学校にもつながる姿勢でした。

幼稚園は、そうした立場とは別なものとして作られました。それは基礎となるキリスト教の違いでもありました。

フレーベルは、あるべき子ども観をまず設定し、そこから宗教的基盤を考え、牧師である父親が語るキリスト教信仰とは違う道を敢えて選んだのではないかと、私は考えるようになりました。

フレーベルのキリスト教の神学的基礎は「創造」であり、「十字架と復活」は後退しています。人間の本性は善であり、罪は否定され、イエスは信仰の対象ではありません。

しかしフレーベルは、当時のやり方では、子どもの「信頼」が育たないと考え、子ども観の基礎を異なるキリスト教信仰から立ち上げました。「子どもたちを悪くする（不信を植え付ける）ことこそ、神に対して罪を犯すことである」ととらえた、と私は考えています。フレーベルは、子どもたちを「神から与えられた存在」ととらえ、日々の子どもの生活（遊び）の中で「信頼」を育てようとしていました。

＊

そのフレーベルの幼稚園が日本にやってきた後のことは、種々研究されていますが、キリスト教信仰の問題を軸にしては十分整理されていないように思います。私自身もその全体像を十分把握できていません。今後それをじっくり学びたいと思っています。

今回私は、関西圏の保育者養成校とキリスト教宣教団とのかかわりを大きくつかんでみました。基礎的な整理に過ぎませんが、養成校がどこにどう作られたか以上に、そのために尽力した人がそのように育ったのか、あるいは人と人のつながりに関心が向きます。

キリスト教の宣教師（教育の専門家）たちが、フレーベルの教育方法を持ち込んだ時期は、神学的にリベラルな（人間中心）時代であり、フレーベルに対する神学的な躊躇はなかったと思われますが、1902（明治35）年に神戸保育会が京阪神三市聯合保育会から脱会した理由からは、信仰者として譲れない一線があったことも明確に見えます。

しかし、キリスト教保育界では、フレーベルの思想からキリスト教を理解する傾向もみられ、恩物中心の保育がキリスト教の保育と誤解されていた節もあります。どこに視点をおくかで歴史的事柄のとらえ方も変わります。

私のキリスト教幼稚園保育者養成史研究は始まったばかりですが、まず先行研究の全体把握から見えてくるものがあるのではないかと、と思っています。

とはいえ、ひとりで調べていると、思わぬ勘違いや思い込みに陥ります。今回の発表では、2005年に活水女子大学健康生活学部子ども学科が、2007年に広島女学院大学文学部幼児教育心理学科（2012年から人間生活学部幼児教育心理学科）が開設されていたにもかかわらず、誤った情報をお伝えしてしまいました。お詫びいたします。

【新入会員情報】

日暮トモ子（有明教育芸術短期大学）

はじめまして。この度、貴学会に入会させていただいた日暮トモ子と申します。自己紹介をさせていただきます。大学院在学時は幼児教育及び義務教育段階における西洋教育受

容の日中比較をテーマとして研究に取り組んでいました。自由と平等という矛盾する理念を抱えた近代教育を近代中国はどのように受け止め、教育の近代化を進めてきたのか、そこに日本とどのような違いがあるのかという視点から検討を進めていました。とくに近代中国では、日本に比して、自由の概念よりも平等の概念が、個人の発達よりも社会全体の発展に重点をおいて、西洋教育思想・理論の移入・受容がなされたという仮説を検証してゆく作業となりました。

大学院修了後は文部科学省生涯学習政策局調査企画課に就職しました。大学院時代の教育思想史研究とは異なり、アジア（主として中国）の現在の教育制度・政策の動向を調査する業務でした。文部科学省での調査は、就学前教育から生涯学習に至るまでの広範囲に及ぶものでした。幼児教育に関して言えば、少子化が急速に進んでいる香港、台湾、韓国などの就学前教育制度や政策を学ぶ機会となりました。これらの地域では、幼保一体化や就学前教育の無償化などの取組が進んでいる状況を知ることになりました。

文部科学省での5年間の勤務の後、短期大学の教員となりました。現在は、大学院時代の研究テーマに立ち返って研究に取り組んでいます。主として、フレーベルとモンテッソーリの幼児教育理論や思想がアジアでどのように受容されたかについて研究を進めています。西洋の幼児教育理論や思想がアジアの国・地域の導入されたとき、どのように受け入れられ、そのさい、どのような反発や批判があったのかを中心に検討しています。近代アジアの幼稚園の成立及び展開と両者の幼児教育理論・思想との関係について分析することを、現在の主たるテーマとして設定しています。まだまだ資料収集の段階で、研究はこれから、ということになりますが、日本におけるフレーベル受容、モンテッソーリ受容について、ぜひ貴会のみなさんから学ばせていただければと思っております。ご指導、よろしくお願い申し上げます。

杉本真由美（青山学院大学・院）

昨年12月に和光大学で行われた幼児教育史学会第7回大会の参加を機に入会させて頂きました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

これまで私は、大正新教育や戦後カリキュラム運動の時期の小学校における教科の統合の試みに関心を持って研究を進めてまいりました。当時、小学校においては、学校で行われる学習が児童の生活と乖離していることや、断片的な知識を教師が一方向的に教え込む注入主義への反省から、教科の統合をめざしてさまざまな実践が試みられていました。それらの実践の基本的な考え方は、現在の生活科や総合学習の中に引き継がれていると考えられます。

幼児教育においては、古くから幼児の生活に根ざした保育実践の蓄積があります。遊びを中心とした保育から子どもたちが何を学び、教師はどうその学びを援助するのかといった幼児教育研究の蓄積からは学ぶことが多いと以前から感じておりました。特に低学年の生活科においては、幼稚園や保育所で行われている保育を充分理解した上で授業を進めることが重要だと思われまます。加えて、最近の私の研究関心でもある、就学前教育と小学校教育のよりよい連携を考えていく上でも保育の勉強が必須であるとの認識がありました。しかし私自身、研究をなかば中断せざるを得なかったような事情もあり、なかなかきっかけをつかめずに現在に至っております。

幼児教育史学会第7回大会で「保育実践史の中のプロジェクト・メソッド」というシンポジウムが行われるとおききし、思いきって午後のシンポジウムから参加させていただきました。当日は、橋本先生の1920年代の及川平治のプロジェクトの理解と明石女子師範学校附属幼稚園、附属小学校における実践に関するご報告、浅井先生の1960年代の和光幼稚園、和光鶴川幼稚園における「のりものごっこ」に関するご報告、鳥光先生の2000年代の広島大学附属幼稚園のプロジェクト活動のご報告と、年代の違うプロジェクト活動を扱ったいずれもたいへん中味の濃いご発表で時間の経つのがあっという間でした。宍戸先生と中野先生のコメントをはじめ、フロアの先生方の活発な議論にはたいへん刺激を受けました。また、司会の太田先生が議論をまとめてくださり、とても有意義な時間をすごすことができました。頂いたプログラムを拝見したところ、午前中の研究発表も興味深い研究が多く、参加できなかったことを残念に思っております。次回第8回大会にはぜひ参加させていただきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。

【寄贈図書】

吉田直哉『保育学の遠近法』三恵社 2012/08/20 出版)

志村聡子『一九三〇年代日本における家庭教育振興の思想－『教育する母親』を問題化した人々』三元社 (2012/10/31 出版)

【事務局からのお知らせ】

1) 第9回大会

第9回大会の開催日・会場校が決まりました。2013年11月30日(土)青山学院女子短期大学です。(大会委員長：村知稔三会員)

詳細については、会報第16号(6月発行予定)に掲載いたします。

2) 会費納入のお願い

第9回大会年度(2012年10月1日～2013年9月30日)の会費納入用振込用紙を、昨年11月末に機関誌と共にお届けしました。今回、会報第15号に振込用紙を同封いたしましたのは、2013年2月25日の時点で第9回大会年度およびそれ以前の会費が未納であった会員のかたがたです。行き違いが生じましたら、ご容赦ください。

3) 会報原稿の募集

会報を通じて、研究情報の提供ならびに研究者間の交流に努めます。会員研究情報、海外幼児教育だより、幼児教育史研究への提言などをお寄せください。分量は3,000字程度で、メール、または郵便で(なるべくデータを付けて)、事務局宛にお送りください。年2回の会報発行時(2月、6月を予定)までに届いた分を、随時掲載します。

4) 名簿の作成と所属・住所変更届のお願い

春は異動の多い季節です。本学会の会報・機関誌はメール便を使っておりますので、住所変更のご連絡がない場合はお届けができなくなります。必ず変更届をご提出ください。なお、新名簿作成については次号にてお知らせします。

幼児教育史学会会報 第15号 2013年 3 月 5 日

編集・発行 幼児教育史学会事務局 阿部真美子

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院女子短期大学子ども学科 気付

TEL: 03-3409-7337 Fax: 03-3409-3985

E-mail: admin@youjikyokushi.org

学会 HP: <http://youjikyokushi.org>

郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会